

中村俊定文庫  
文庫 18  
722



鳥の追善集

華の終

松  
露  
老  
老  
師  
老  
松  
露  
老  
老

松  
露  
老  
師

天道恢々雖小乞必至可觀者十步  
之澤必有香艸豈不信乎至如謳誦  
童謠街語巷語王女懂下情壘欲知  
閭巷風俗故立釋官便稱說去今世  
所稱俳諧乃古謳誦街語之流歟芭  
蕉氏者歷世隱於俳詞周遊天下名  
山却邑風靡一世其私泚者烏明叟

性高潔寡欲夙遺外世事子思汎諧  
又周游天下迺山川之美土風之異  
名區之蕉四時之報一寓於句空中  
之音水中之月興寄不淺其詠雋永  
穆如清風漸至自然焉然為其人醇  
謹無他尊師道所嗜好七十年一日  
富貴不能淫貧賤不能移無俛石之

儲晏如也自清雅有知人鑒者稱以  
為冰鑑矣此廩之風采庶幾王德隱  
君子之遺風矣凡世人賤近而貴遠  
自昔然余嘗謂墨名而儒行者歟實  
世不乏人惟小道之可觀者十步之  
澤必有香草其根美則其葉香頗有  
芭蕉氏之隱趣而芭蕉氏之風始可

其言已詩云雅其言之是以似之其  
師是法源所漸生非其氣類誰能知  
之乎

享和元年辛酉秋九月

東海逸民菅誼應

需題



蘭陵素馨書



東海逸民

湘水日暮... 此人之多矣... 仰之... 松... 七... 何... 佳... 選... 亦... 板... 一... 一...

一酒 奉 能

起子... 常規...





けつ空や既子ひかしは西之の色  
 川よのちま合ひりか松かきり  
 いさきよきる荷車や江都の春  
 わすか葉のむらさきたし(芥子  
 取とめ白あるな(むらさき  
 喜油の(笑)や世の中梅の(笑)  
 なるや(笑)中とつ好(笑)分(笑)ま(笑)  
 有(笑)れ(笑)一(笑)野(笑)又(笑)山(笑)又(笑)西(笑)段(笑)た(笑)ら(笑)

四ノ即邊 三白十

春



松雨路翁肖像

門人振筆まきり



此翁蕉林先河字  
 世と河人不易徒欲  
 りん生涯遠隠超子  
 蒼松月石の年々

東海道人

いり草やうきとん立しりのあゆこ  
感心物事のふしとて言はしあはる月  
夕飛まや破山工とく幾子か啼  
神木やおあしきの操めなせ  
古さや胡粉まほさくねえん依  
はるあつものやとる大黒けしうた  
東風吹てその裏かす墨かな  
苗也や世といふ花白一枚  
蝶<sup>胡</sup>蝶<sup>調</sup>つとむつとむつと雨あかり  
切<sup>草</sup>草<sup>草</sup>又<sup>草</sup>昇れ<sup>草</sup>しすう孔<sup>草</sup>その

いり草やうきとん立しりのあゆこ  
感心物事のふしとて言はしあはる月  
夕飛まや破山工とく幾子か啼  
神木やおあしきの操めなせ  
古さや胡粉まほさくねえん依  
はるあつものやとる大黒けしうた  
東風吹てその裏かす墨かな  
苗也や世といふ花白一枚  
蝶<sup>胡</sup>蝶<sup>調</sup>つとむつとむつと雨あかり  
切<sup>草</sup>草<sup>草</sup>又<sup>草</sup>昇れ<sup>草</sup>しすう孔<sup>草</sup>その



痛拭し午よくなたるヤ敷あふ  
うらぐとゆき強々土持カカ

とる友

時をぬ月し霞志言根あや  
付花既くつれてほとくま  
二十<sup>五</sup>子の男造し 一夜のえ  
ぬの草舟帳さし 玉造の端  
みしうあや古く子よおあよ起  
せきとあやかく板あのを左御寺  
かたしあよあふふて木下い

新あやの強すしをちあうた  
五月るちしほをばあはせうあ  
松いまのかうひあけりせよあ  
りう竹やあひくぬあまの書  
君あはやあゆめう角持  
川せよあはあはああのちうた  
屋らあや二子<sup>網</sup>の目さもきて笑  
あまのあまあめくくアかな  
栞やあまあまのゆい所  
六月の池とあやう草のあ

かきつやあるり中もあああ  
雲の字裾は世をけけり  
心陰や既し清物の言方となり

48

字とひと宮まをえけり  
う記秋を指しし一  
秋顔やせいの花の  
好風は親あきほ  
ふと色や沖の  
志松や飯の海土の松

いらいと七月さる暑かな  
暹露や月も二の草の原  
はつらやゆくは地へありな  
名月や加ろとあて葉の  
十右根やわつかふ園の名  
かき高し大名やま啼  
夢へ来てぬらとさか  
古扇子扇の屋りす  
もこらんと足るるを  
心澄むや鴨之とそあ

此のやうなるい船の住子に下  
意致し根なきを男を角力取  
能之れに竹一本の如し外  
はあまやかやし神の子は神  
未枯や子に海にさる海に  
誰印を陽殿にいとく糸瓜に  
みよとまをさる年(立)穂首を  
江の月根透通るる石の<sup>かた</sup>時を  
あるあこまを勤人等の隙  
世の天をら垣の外にさるの年

饑餓をを戻せしあはるる  
ゆるゆるや日影あともくしに柱

みよ

松を風柳をさやおしあま  
浜をうけてを庭やうけて小夜時  
何人のにおかぬ海をを冬あま  
十月やあまあつを<sup>せ</sup>て北川  
神を風の中を<sup>は</sup>り小まをあま  
こま<sup>は</sup>とさるはあまを枯神に  
あまをあま<sup>は</sup>く<sup>は</sup>の<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>く<sup>は</sup>え

地心丸の骨を油をのすから引  
 流す似る人踏ふ<sup>(足)</sup> ちのあふふ  
 流く知印の跡でもとるやをせ月  
 すま電や強の控し人のあ  
 と記きてもつ電や神むくい  
 海り花さひの外の日陰を於  
 ぬ川や鳥のほこ子網に控  
 空<sup>(控)</sup> 控やうい控<sup>(控)</sup> まのち大根  
 ぬ<sup>(草)</sup> ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 控<sup>(草)</sup> ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 控尾花回ふをををををを  
 行年や新能障子まらぬを

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

東海<sup>海</sup>  
 鳥<sup>鳥</sup> ぬ<sup>ぬ</sup> ぬ<sup>ぬ</sup> ぬ<sup>ぬ</sup>



此終々業を以てはるかかゝに譲与へ島醉師に隨  
 て南総に移ひて金四時亭雨林叟のものとをあり  
 しとしをこの社友巨梅子か刺刀を産て薙鬚し  
 種瓢といへる一集と持して俳諧を味む一遊斗  
 藪の風士と成しはく南総小總常陽上毛の風  
 こよ風走し車都の杖を帰しては師の膝下を去  
 うす刀筆の吏と成却蹉跎塚磨固木驚枕して學ひ  
 三代の選集七部の句集諸子百家の口神授神奧  
 思ひをひかめて其意を味ひ知ると知るとして  
 解詠は師の問ごと一棒一喝の嚴しさを厭ふ教

(大東京文具子エーノ特製)

ゆるに湛有れは働もまた切と尽し禁下指ふ  
 こと二十年の戒を背かす時と室曆卯六丙子  
 の夏露柱氣松露庵を以て神足なる左明使に讓  
 与へ浪華なる詞友の根を應じて東海に島叟を  
 鳴らす同門星敏悟師と俱に笈を千里に履て  
 信從し行脚歳を重ねぬ其來従の紀行は凡字  
 唯行と題せし冊有是より前後東海東山の街  
 を乾坤独歩なすこと教多たひ華に宿借り月  
 子廻夜し霧に浴し露に臥て詠而帰る度毎や區  
 旧蹟眼前のくさくさ賦有記あり序有銘あり

風光句章の教：槌袋公と重ふして社友のいへ  
 一と西<sup>足</sup>かろう 二世た明<sup>足</sup>を早ふして師<sup>歸</sup>  
 甘師は湘中鴨立<sup>足</sup>の迹在せハ松家庵をして翁  
 日付属すこゝに於て三世とす諸君の社牛  
 心を傾<sup>足</sup>集書几上に重み<sup>足</sup>近連ます親一み  
 凡流日く日月の盛よしてやハ三十有余年常  
 て世の徘徊<sup>足</sup>交うす独元祿の風調を慕ひ  
 造化自然の道<sup>足</sup>を采<sup>足</sup>し志<sup>足</sup>故<sup>足</sup>をもて高貴<sup>足</sup>権門<sup>足</sup>居<sup>足</sup>せ  
 と<sup>足</sup>至<sup>足</sup>う<sup>足</sup>す<sup>足</sup>困<sup>足</sup>弊<sup>足</sup>有<sup>足</sup>す<sup>足</sup>病<sup>足</sup>多<sup>足</sup>き<sup>足</sup>も<sup>足</sup>て<sup>足</sup>す<sup>足</sup>唯<sup>足</sup>祖<sup>足</sup>  
 翁の神骨を失<sup>足</sup>わ<sup>足</sup>て意<sup>足</sup>纏<sup>足</sup>場<sup>足</sup>を在<sup>足</sup>らん<sup>足</sup>事<sup>足</sup>を云<sup>足</sup>嫌<sup>足</sup>ふ

(大東京文具チエーン特製)

意<sup>足</sup>纏<sup>足</sup>場<sup>足</sup>を在<sup>足</sup>時<sup>足</sup>は<sup>足</sup>氣<sup>足</sup>を取<sup>足</sup>る<sup>足</sup>事<sup>足</sup>を<sup>足</sup>務<sup>足</sup>と<sup>足</sup>して<sup>足</sup>終<sup>足</sup>ふ<sup>足</sup>は  
 早<sup>足</sup>陋<sup>足</sup>を<sup>足</sup>治<sup>足</sup>う<sup>足</sup>む<sup>足</sup>事<sup>足</sup>を<sup>足</sup>恐<sup>足</sup>る<sup>足</sup>故<sup>足</sup>に<sup>足</sup>世<sup>足</sup>を<sup>足</sup>交<sup>足</sup>う<sup>足</sup>可<sup>足</sup>実<sup>足</sup>  
 又<sup>足</sup>隱<sup>足</sup>者<sup>足</sup>の<sup>足</sup>風<sup>足</sup>骨<sup>足</sup>清<sup>足</sup>高<sup>足</sup>操<sup>足</sup>探<sup>足</sup>却<sup>足</sup>下<sup>足</sup>の<sup>足</sup>詞<sup>足</sup>字<sup>足</sup>其<sup>足</sup>在<sup>足</sup>の<sup>足</sup>お  
 る<sup>足</sup>は<sup>足</sup>あ<sup>足</sup>ら<sup>足</sup>し<sup>足</sup>其<sup>足</sup>類<sup>足</sup>ひ<sup>足</sup>は<sup>足</sup>矣<sup>足</sup>な<sup>足</sup>る<sup>足</sup>如<sup>足</sup>生涯<sup>足</sup>事<sup>足</sup>を<sup>足</sup>  
 俱<sup>足</sup>せ<sup>足</sup>可<sup>足</sup>運<sup>足</sup>杯<sup>足</sup>を取<sup>足</sup>う<sup>足</sup>可<sup>足</sup>男<sup>足</sup>女<sup>足</sup>の<sup>足</sup>お<sup>足</sup>つ<sup>足</sup>ひ<sup>足</sup>言<sup>足</sup>は<sup>足</sup>る<sup>足</sup>類<sup>足</sup>の<sup>足</sup>  
 折<sup>足</sup>面<sup>足</sup>の<sup>足</sup>其<sup>足</sup>情<sup>足</sup>を<sup>足</sup>連<sup>足</sup>こ<sup>足</sup>ろ<sup>足</sup>樂<sup>足</sup>て<sup>足</sup>流<sup>足</sup>せ<sup>足</sup>可<sup>足</sup>歳<sup>足</sup>の<sup>足</sup>且<sup>足</sup>の<sup>足</sup>屑<sup>足</sup>  
 蘇<sup>足</sup>の<sup>足</sup>香<sup>足</sup>如<sup>足</sup>歳<sup>足</sup>且<sup>足</sup>の<sup>足</sup>作<sup>足</sup>り<sup>足</sup>て<sup>足</sup>其<sup>足</sup>酒<sup>足</sup>の<sup>足</sup>味<sup>足</sup>を<sup>足</sup>知<sup>足</sup>り<sup>足</sup>裾<sup>足</sup>破<sup>足</sup>る<sup>足</sup>  
 一<sup>足</sup>と<sup>足</sup>す<sup>足</sup>は<sup>足</sup>老<sup>足</sup>婆<sup>足</sup>か<sup>足</sup>針<sup>足</sup>を<sup>足</sup>履<sup>足</sup>ひ<sup>足</sup>咽<sup>足</sup>湯<sup>足</sup>す<sup>足</sup>別<sup>足</sup>は<sup>足</sup>茶<sup>足</sup>を<sup>足</sup>喫<sup>足</sup>  
 一<sup>足</sup>と<sup>足</sup>寂<sup>足</sup>る<sup>足</sup>事<sup>足</sup>を<sup>足</sup>樂<sup>足</sup>し<sup>足</sup>む<sup>足</sup>茶<sup>足</sup>香<sup>足</sup>ハ<sup>足</sup>龍<sup>足</sup>鱗<sup>足</sup>糸<sup>足</sup>の<sup>足</sup>教<sup>足</sup>を<sup>足</sup>交<sup>足</sup>  
 け<sup>足</sup>生<sup>足</sup>華<sup>足</sup>は<sup>足</sup>入<sup>足</sup>江<sup>足</sup>氏<sup>足</sup>に<sup>足</sup>學<sup>足</sup>ひ<sup>足</sup>あ<sup>足</sup>の<sup>足</sup>其<sup>足</sup>道<sup>足</sup>の<sup>足</sup>如<sup>足</sup>授<sup>足</sup>

相傳を極む。尔よりしむた、柳原師の戒を守り  
 其業をもて世に衞ひ人々教ゆる事と好まざる  
 凡流の伎藝として寂を得るの媒とす。食を終  
 るの事も見卷又書と廢せし。前物の及ぶくわ  
 しく雅言俗字の違看よして短冊扇而馬琴の墨  
 色白の雅韻を以て漢の味す。伊倭又あり可俳諧  
 を根の達者と稱して可ならん。然る年々社中月  
 並の撰四時雪月華鳥詠のくさくさ。極木に琴の  
 の下書は誰彼の書生を雇わす翁目まのやあり  
 字のこと古稀の歳齡を過るよて眼鏡の力を借る

(大東京文具チエーン特選)

事たぐ々々性正直拍子朴よして一度は議して堅く約  
 を更せす。飯も論波巧弁の徒を忌嫌ふ故に門  
 人升堂の俳士。昨鳥鳥光太の輩俳道に間違な  
 せし。其人と有りはたの偽。庚朱を奪の意  
 を見限り漸々室相入るの際に至りて師の掟に  
 背しとを思ひす。吳尼教訓再三して用ひす  
 小日飲位しはくして頻廢す。其余种是の二三  
 子或は多病ありは遠旅し朝暮羽翼に受し。亦は  
 實に翁の不幸なりき。既に齡飲くに及ぶ老疾  
 日々に逼犯せばや筆研に倦門生奈見に松家



庵を付居し社中忍庵の業に代りしめ合壁に閑  
 居して木耳散人と号隠中の隙と成自誦しと始  
 終りを兼せりと長喃して閑言の机上に眠南華  
 真人の玄妙を探て我を知るの友との已風詠淡  
 笑して老を養ふ事一とせ斗ふをう記嗣庵の  
 能凡流行に後忍庵の撰元祖の規矩に遠翁か撰  
 拳と懸隔せしかハの風まさ身に愁瘡して先師の  
 遺命に背事を憚り趣意は露柱庵鳥酔師の自画  
 附属背像子面し告ていわく我身後の事你に  
 付す你よく我生涯の如くせよたし先師の風の

(大東京文芸子エーン特選)

教へを波及せむ事と社盟あるもの、道にすめ  
 やかなん事と名を後世に呼ばんこと、三つ  
 の顔の己像を我我則像我こゝろをもてこゝろ  
 とすしと具真蹟恒に床に安置して在す如く  
 す此遺命を胸に畫たしに先師の靈位を恐る  
 をもて己こゝろを約す老躬を責務て又松露庵  
 に再住す同門坐末膝下に親炙し純事へて意  
 父の如くす近連翁を慕て親出の業ますます逢  
 む翁性順逆を憫良業尽せとも利あらず諸翁た  
 めに午と束ぬ此翁よりしては病有日と夜と瘡

して止まらずか中にも定日の會席は愕然と  
 して起坐を云々して詠弟子のあり道の萬具  
 を論談し句章の刻添して門人の感と解説  
 し凡流の外を語す事なしこゝろ嚴丈にして  
 一日二百題の詠吟物の數とせぬハ年々歳々  
 の真確の尽す尽す言の葉は車の轆を炙り如  
 く新しき趣向の句とも得る事多し！ 社中の耳  
 と云はしむ其風調やおのゝ之祿の準履と  
 背かす社友をしてあやます存せしむる曾て  
 恒にいへらく我先師の掟に背きて今や流行の

(大東京文具チエーン特製)

句躰をなさば諸子其躰にひとり是と一と又其  
 流水又寄らハハいよく聞へ詠子の句也やな  
 し怖したるや被過たるや奇を未たるの句作を  
 なさむこゝをもちたゞ世は調を速云直眼前  
 不易の琴と見え大いす水ハ世人ゆ我をして久し  
 き下手也といはれ上手と呼んで誤た人より下  
 午と言れて正敷まハ忘かす世の所謂虚実自  
 在の自在は虚をもて実と一実をもて虚と作り  
 たりには非ず題を得て趣向なきを虚と一  
 趣向を得て意成りて実と可聯句は自他

の分ちを正しく自然の变化を自在にせよ、新  
 うしき句をのこ得まじくゆふし思ふたか  
 我童よしめし教りや下草深印かくす如し、生  
 涯若逝の書はたのしく、庵は瓦板敷く初花門へ  
 のたのし一助とす、書肆に標しこ世は名聲を  
 こを好みまゝ賣り市中の隆又して風流を  
 へりと言つへすが、こゝに文章和改元の夏木  
 無丹中のせりの會席は珠に持病や、身体を  
 和やとて、我輩の舊古を勵し十有餘年の暮を  
 なす、其句おのこ、金ふの御書有とか中よし花

（大東京文具チエーン特製）

終の章は是や自の造物の变化始終を感し、句  
 意明らかは無常祝祭用示悟入獲麟の章とて言  
 つべし、是と世の笑収めとして同じす、八日  
 の朝且よりいたつきの枕殊に重く九日の夕下には  
 長く女界を辞して安養不退の淨土へこ行脚の  
 鳥藤を走らせ玉ふ時、春秋七十有餘六歳嗚呼  
 命なる哉、嬰鏢の翁我徒蕉門の棟梁忽ち彼こ  
 と今より後詎と問詎と問ましと飲泣腸を斬の  
 涙袂に滴め斯而遠近同門の誰彼つこひ集哭泣  
 しこ棺を送り城北清草正覺蘭舍塔中拈相敬院

境内に燈籠塚のほとに葬られた塚は翁在世の遺  
 立自筆を挿し松尾華の一句は身後の記念也と  
 前日祖翁の遠岳石碑樹立捨香の祭儀に奉じ水  
 ぬすハ藻友象儀して別子病中の吟と鐫り可儀  
 曼字を加へて傍に年月をしるし社友と俱に碑  
 前日踵跡し一柱を捨つる念誦合爪敬首して  
 蚊柱の折替へ跡に啼音が存

好文を為す水

はまのりお

好文

水

(大東京文具チエーン特製)

捨香

新琴の交ふかき鳥明雅足軟くに世を  
 去り玉へハ老業の力更になし  
 介別もうしやしめりて汗拭ひ  
 松翁主人はかりすも身まかり給ふと  
 先に驚しはし聲を飲断腸の思ひし  
 きりに墜涙袂としほりや四十余年  
 の因也けりさ水ハ過し草月の末何  
 と氣思はれけむ紀念に送る連雲の峰  
 祇は無常の煙哉と彼徒然草の法を前

松原庵 鳥酔

一章を呈して敬首す

風爐

子向くも破るむくも涙かな

翠蒼亭  
雅龍

我師為明居士ハ元祿翁の跡を慕ひ云門  
の掟を云しく字り風流を掟ひ玉ふこと  
七十有六歳時み此水無月中の九日りか  
原る子や仮寝<sup>の</sup>枕重く心地常たらず進  
方臥水しよりあゝなく浮世を辯し玉ひ  
ぬ斯る本意なき別やある実よ世は頼  
なきものかなと思ふも我も師よま之へ  
こやゝ或十とせとありしも今は只夢み

書に件の一章を添へられし是を負雲

の終之を再吟して嗚呼なつかし

はかなきは煙

みひと一雲の峯

四時亭

泉

松翁老師我慈父と同<sup>樹坊</sup>に居して旧來の

交厚く僕はまた十七言の教へを受茶道

は凡雅者のたしむへきものに社連此道

すら会地に傳へ秘め置れし事とも隠し

玉<sup>はわす</sup>は<sup>す</sup>許されし恩惠の子がき報するに

ものなしせめとも旧庵の牌前子独坐

し記念の帛沙はきなきつゝ一破を捧

(大東京文具子エーン特選)

夢見る心地し暑き涙をぬくひつゝ師が  
水くきの跡残る扇子を坐具に稱名念ふ  
して

復瘦の我身つ小存し師の別水

起草亭

鼠六

林鐘廿一日未の刻葬送悲を同ふする

甘露友の諸子挽哀して正覺精舎に至る葬

式の襖早ぬれハ箕輪なる火屋を送まい

うせ一把の松明を只一片の煙と存す是

や侍姿を揮するの終なりけりと涙せす

あゝす翌の日は又かしこに至竹木の筧

(大東京文具子エーソフ特製)

もて遺骨を拾上つゝ口に唱ふるは唯室  
号の六字の己以時暫し憶て悠としてこゝ  
ろこゝに非ず

多まきゆる思ひや骨を復理原 坐 來

未の五日初願忌の法會は近き吹筆を

染玉ひし扇面の水くすに蓮咲や水潔よ

才淺の赤は真蹟(蹟)をもて席上の本尊とし

花の終の遺章に侍瓶坐來脇起して藻友

おのく 聯句一順追悼の章を捧稱名敷

聲存し 嚮礼とす二九の本願空しかうす

一念傾心入室蓮池と聞な水ハ今や彼玉

の花の墓墓に降りなきの快楽を極玉ふら

めとたのもしく想像して

見月王日わむ五色の蓮の真盛り  
富水

初願忌法音?

五十頁

紫陽華や嵐のうき花の終

脚起  
鳥明石士

涼しき流慕ふ明暮  
坐來

業の飢に軽う世を過て  
嵐六

(大東亞文具子エーン特製)

以下 雁龍、可名、泉澄、錦市、鳳尾、清風、芦花、左鼻、百里

振鷺、田莖、梅丘、柳江、坐泉、燕子、鷄二、雨靜、暮春、青奴

風葩、烏墨、有月、吹笑、銀葩、鍾豪、雪彩、山聲、菊家、梅弓

自橋、利玉、富水鳥碎の一、順、五十韻

追悼

初夏の頃、夕陽へ登る旅傭ひを詠るに

師念、吹る道の小折を授玉ひさし、つき半首

倉して水無月のすゝ、歸舟し、  
帆に物故あり

りしを、聞学、誓さる悲しむ

みしか、夜ふ影の、影る別れかふ

過し 弥生のほしめ 松島家守を乞ふとみ  
ちをくへまかり 師翁の遷行し玉ひしを

迎火の何やう淋し 焚こほれ  
柳條

蚊やう火の煙ふいとく 涙わら  
故春浦子 及 室

大 飲 忌 香 活

玉の菱子 冠あきか如しとは思思の雅あるを

しりす 泊泊欲深うして 飲む事と當うとおも

ふは 詠 21 之 2 冠ぬり 戸子して 不風靴

大東亞文具子エーソ特製

の最上なりと 双ヶ岡の法師もきこせられ

しならん 珠 2 三色の 醉癖ありて 乱る及

ふ こととを 裡翁も十七ヶ條 戒められし

と生涯是を 懐只 冠 2 咽を潤し 饅頭子食

打鳴らすハ 老の 栗し 2 粒かしくも 厚ヶ

れハ 腹も立、す 朝 2 又 2 句を 捨 2 便あ

りと 年次 日 坎に 癖 在りき 島 明 冠 2 士や

あ と 1 日ハ きのふと 過けふ 7 日な

水ハと 祀 友 深 笑 2 集 鳩 1 法 志を 覚 妙 玉

一ハ 俱 2 具 好 2 水 1 を 備 へて 精 靈を 慰む



穂斜して多世享けふの餅の敷 鳥 醉

思慕

師物故ありてより独旧庵の柴廊を字了  
に社中諸子慕ひ登く朝亦夕亦子言伝絶  
へ片珠には氣六執龍のニ子情ふかくも  
足さること存けり法堂こゝ所のまゝ  
とせ日くは富水のぬしと雨吟して相  
俣に澁柳くさき巻と手向ものとおん  
日穀もつれなくや大飲の旨めくり来  
ぬれいりふやまの塚前子伏して

(大東家文具チエーン特製)

身に流やせりの果を今 望 来

去るもの日くは疎かりす我師在せし時  
は寒暖起居を訪ふこと三日一交五日雨  
交今や九巻に去至ひてより日毎寸陰を  
得れば旧庵に入待瓶坐来子と膝付合せ  
て筆研設詠すて皆七跡のここの己た  
ゝ子師恩の九ヶ一を酬むと存すの外更  
に思邪なし日比授教の有がたきや遺章  
の感吟思ひ出え法出し七日くを手向  
の巻七の採題句葉の問いふことは只

在し世語り斗ちや、指折結ちけふや中  
 陰尽りの云廻り来ぬやは松相蘭食子し  
 へ法會を覺え過れし、煉の良夜を費し無せ  
 しくして遺章の一軸を席上の壁にたれ  
 友おのく、聲を収因寂として留視の章を  
 練一念一香を捧げ、敬首す其終ハ在か如  
 く其聲を聞ふなし、悲泣しほくやまら  
 有と芝陰の尖なるや、嗚呼  
 おしひきや中陰満て月子涙  
 追悼  
 寫水

(大東文具子エーソ特製)

松露菴主翁忌辰

名譽都下聞

遺愛独存句

暮畔一青松

何為溼雨云

在

榭杜多高菴

悼 松翁老人

結相一葉欲零時

唧々陰送夏 懸

松露菴前羊角起

傾張鵬翼入天池

在

時 空圓聖子

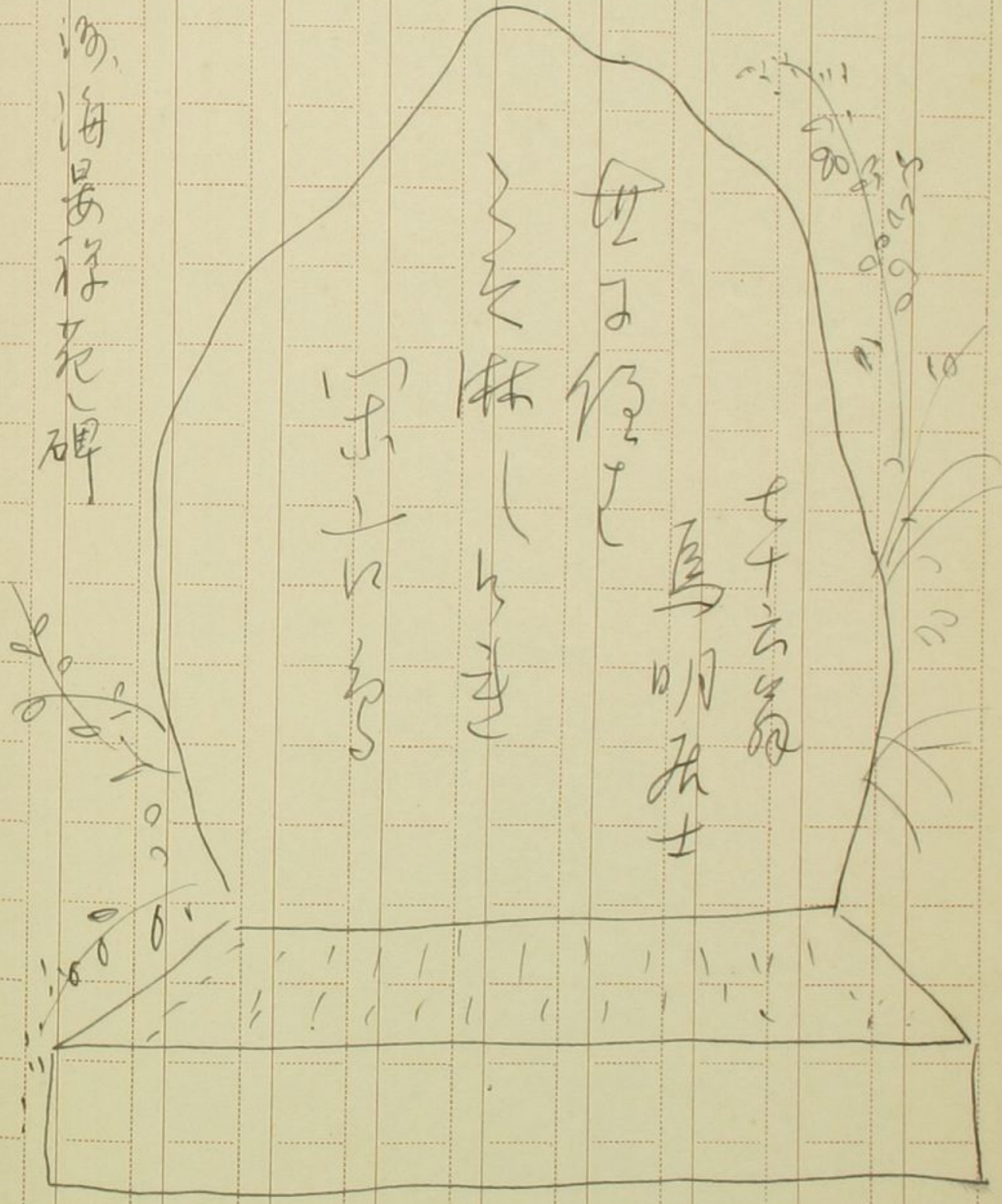
水無月半道の暖蓬菴の玉と白く松翁老人と悼

上品と定て白し

翠の葉

春 蟻

品浦較海海晏祥花碑



(大東家文具子エーン特圖)

塚中塵藏

一 死師在世の生遺

一 真蹟短冊一紙

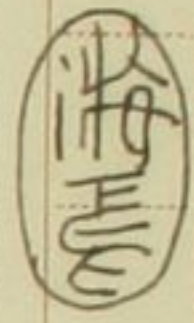
一 護念經一部

崖六 坐来 漏水の三吟 歌仙身

いまこそ 他郷 (抜物) 衣帯水松家庵 浪花 大江丸

見ぬ 款の足おすめおしふ田畠さ外 三品 観 静

有明や庭春水鳥 雲子啼 三陽園 李杏子



松露菴烏明先生

寺口王五九追悼捨香辭

芭蕉翁七世の門松露庵烏明居士行年七十六齡  
 享和元年丙辰夏六月十九日丙申遷化待瓶坐來  
 子同門富水子訃音の書を吹子告了嗚呼師は東  
 武の産壯年より烏老師の膝下子教を受玉ふよ  
 り所謂俳道の並指美象を見性して芙蓉玄冬子  
 も笈を負ひ師子従ひ東西南北へ陪行して師が  
 机下子居して筆を助玉ふ事幾年其貞節神明子

(大東京文具チエーン特製)

通い終り鳥老師生前のゆるして俳燭を輝し玉  
 ふまた有騰の好士繁多たり猶夏炉冬扇の教へ  
 を堅固の字りて名利を離れ一約たりとも遠可  
 其精神清涼般若白生誕無事帯糸ハ大天目に至り  
 花の香も又一家の模範栋梁たり平日道を難有  
 ふして月々四日ハ鳥老師の靈日所川阿久井が  
 崎海舟禅舎へ行程三里ほとを遠きとせ凡廟廟  
 参急慢なく二七の會日在庵して一祀も踐約せ  
 す歳々年々の月並式提式要録五百題をほし  
 め都て能道覚悟の教冊又是の師の烏毎の集り

かねへいふ子いとまある生誕の行状ハ藤友  
 房水が禁文ヲ諫りて賛せしつゝ一継過しこ  
 と存と妻係なす予不可思義の因と縁とあり  
 二前髪の吹雪都へ出てより此師の門子入且夕  
 又教示を受しが其次孝仕のの家人不幸子して  
 其家僅思ひく二離散す予ニ君子事へさるの  
 志を流りて既に松家庵に入て菘あの熟りをせ  
 んといふ師完承として是を許し玉子より能  
 漢の行李を杖のたしめとして名古曾亭子して  
 簪を拂ひ流寄るす僧子非す俳諧茶句を称表と

（大東家文具チエーン特製）

定て数度師に陪行し南南北北兩總お尻上毛ハもの  
 かハ国より函と周遊して只積年を知らず師子  
 常子いへうく上午といわれし名利を得んより  
 下午と呼れて數代の師名を汚すハかり可其禁  
 を能尋ね知りて美あり山を知るハ午前一分  
 の狂ひより矢先あの謔を思ふハ一又往くを  
 追ふハかうす来るをこはむハからす已が名を  
 得んとせす師の名を汚すましとすハ一と行李  
 こと子忘れあよさのふの菰のくく今日あの錦纏  
 たる流澄の心を妨ぐわすましとて庵に傳へ

るに決更ふかくし玉ふ事な乳時に天明八ツの  
 歳姑およしの、花を心につくしかたすへ知ら  
 ぬ火のほて長崎の津に浦に近し独あせんと  
 軟ふ子いへらく俳諧所謂居を宇りて勝地を知  
 りんや短尺も不見ハケ星の遠子同しといへり  
 吾いおれ死たりといへと健<sup>他</sup>あり美星の遠も一  
 歩より起る精神<sup>風</sup>運鉄たり時を失ふへかりす  
 とて其<sup>お</sup>うりといふ小川<sup>近</sup>駅<sup>出</sup>出るまめやか  
 りも死師送る小たり四とせ周遊心の終みして  
 めえたくも師に謁する子柔弱瘦胃大膽不敵子

(大東京文具子エール特製)

も出来たり此有踊して悦び又旅の夢夢りり旅  
 は覚悟たり再會ありけりて笑か教あかり涙を  
 うあめ玉ふ。今更子其傍ありけり。明子春の  
 二月故郷の母やまふを告来る衣玉中將長岡の  
 子ること有といさめ玉ふとい七さまかりて春  
 をつとめよとや道すかり摘め百草も芽出ん次  
 との送別を玉ふ是や揮顔の納めとそ有れり  
 けり故郷のたうすめも程なく終命し予との  
 艱きの餘りこわ金鉢多病の上行脚数年の寒暑  
 を凌し中へおわ歩行一足の遠きも叶わす、葉

力を頼いて故郷に止る事とは存り下り。せ  
 めてハ恩恵のたぬ思ひの好子にまつゝ祖翁の  
 碑を樹立し或は神祇仲間へ款を掛奉り事十有  
 五面餘悉皆島明光師を巻軸として予また傳瓶  
 の坐子振すや此はこそ師平生篤実の好示儀等  
 も餘先後りハ今も因茲に波に松蔭の尊徳人  
 普く知れりけり因茲に訃音を聞ての江雲を隔  
 れハ海を知らずして師を歎くものいくもくも  
 や<sup>心</sup>是上午下午の編みか、日、すして併送係  
 然として自達との存存のしし

(大東官文具チエーン特製)

生前のハ時々文有て世をありかたふし、予  
 また書をもて安否を伺ふ折柳ハ僕忘疾のやま  
 ふみくるしお師より是またつハしとを思ひけ  
 る有と申おくるよさハ来て歎に二兩日の病床  
 子<sup>聖</sup>正念堅固<sup>聖</sup>土蓮地の納涼真如清光に從生  
 し結ふ。全く其篤実より孰も不<sup>不</sup>なるハし尊  
 れうつハの佛写ハ聖名をかけ一炷を拵て歎  
 道し幾とせり高恩を思ひ出ハ病牙の支那  
 を悔し臨終の一偈をふやしてと轉刻意味して

泣

骨子入むわりの汗は流りこ(むわりの)三陽和立祖風  
右辛酉晩夏

鳥明居士の満中陰を嘗て初夏集徳して第六  
龍子子云松家の空居の何せむと予かいふ望来房  
也師を随ふ存する年あり殊に末期其の命抱を  
の印有たれは彼を譲らんといふは是れおのの同  
心と詠所の記及は告松家累代の華押とも又家書  
を讀して履主とす又いふ居士存す時僕たは心河  
流弟子の中独居水の已何然ふ事いかに居士是示と  
いへらく彼が父富川は師の御弟子して我と葉良の  
交ふれ我門二世の凡流有れは我思ふこころ有と其

(大東家文具チエーン特製)

意と叫れはいすくと去て追ぬ幸も良席存水ハ  
我師の号たる高柱庵を贈る松家の礎尚堅く流  
柱と不朽の庵と号と祖を母の席より一聖前に  
閑いす

老かれす喜ふ枝葉松と露り 松原庵鳥破醉

滑稽談笑の道ひろき甚乎尔 於葉たに咫尺に  
晴暗らく識をの識を恥さるハ諺よいへる下午  
の極好其執心と爰玉ひ一先師の詞耳は有述こ  
たは松原庵の主叟 漢み許して墨門人の教子加  
已り松家主人か句業を助よ辞する事なかれと  
て高柱翁の庵号をたもふ追たる名は及さるに



跋

東海房烏明居士ハ予カ雅兄ニシテ鼻を揅ニ批  
 水泥硯席を俱ニする事五十年生得旅に遊不  
 事と好トハ一トモ長柄の橋杭や井手の蛙と錦  
 の囊に入て頭陀に袖めするもあらず、夫レ  
 是も五七五に擗りてたのし或時ハ師に陪し  
 又あらず時は千里を独歩しておえらく名所古跡  
 又句存しといふ事なししかるに年暫く暇送の  
 痴を愁ひて遠く九節を告罷る事を恐れ北邊に繪  
 圖寫てふレのありて此の中にたし井邊るそこ

終ニ其印を佩了事とは成けりし  
 霧既に結ふハほりや霜柱 露柱庵 富水  
 師の恩は須弥より高く信友の志も又蒼海より  
 かし短才情弱なる下 皮み眠柳居士ハ傳ハリ  
 し印を續ゆと又既を低てつくハ思ふに龍の  
 腮の珠子ハとしく是を得て才力存しと辞るに  
 松原先生ハ云云庵を立るハ師恩を謝す袖ニ存  
 おハ社友ハ無礼又と白眼せしハ  
 仰は中時雨の庵の松柳 松原庵望東  
 吟詩撰  
 吟首して

（大東家文具チエーン特製）

やかしこの糸を取廣げて畳の上の行脚也と眼  
 を壓め心を欲はしめて老を樂しまれけり無  
 水月仲九鳥の事になん一たひいゆく名所なり  
 と法の蓮足は旅立れり水々も去るもの疎か  
 すして日よく社友の訪ふ事なす時日倍せり  
 情おもふに死せり孔明治る仲達と追ひに終  
 算たりといへとも又人は人を謀る虚又して是ハ  
 道を導くの実也誠に虚実自在の清海を慕はる  
 事面目とやいわむ養とやいわん単て浅草権寺  
 の塔中哲相教院に公の燈籠塔と物好に建立し

(大東京文具子エリの特製)

石の傍に草採て鳳啼や雀咲野、枯尾葦の章あ  
 り其地下に遺骨ハ収むといへとも品浦海晏  
 禪寺に眠柳居士の碑を營れし前の鳥酔居士の  
 趣意は大津義仲寺の木曾殿とろしる合は祖  
 心羽の碑あり此境内には最明寺殿の横あり五  
 十三驛の首尾に大橋の塚に隣る事を旨として  
 松風墳を築祀し事ハ松のく知る處之されハ  
 鳥酔居士をばしめ左明百明の碑有て市殿山の  
 葦の吹当山の紅葉の時あゆみを運ふ便よしと  
 信友心を合て爰に碑を并ん事をたくみ在世讀

誦ありし阿弥陀結一卷秋日和既に世はよし星  
 月夜と川へる自筆の短冊一片糸と歎初めし  
 頃より年々歳々短たるを憐れものし置水て生  
 齒右三品を一壺と収めて地中より獲し一葉一  
 鉄の土をかき取り形となし今の露柱庵主人富  
 水手洗ひ漱き一字九揮して碑と記す其章八圖  
 とありわ我また言葉と贅せは折柄遠近の諸子  
 贈水る章を冊と綴造章の五文字を以て華の終  
 と題し碑前と備へて精霊と慰む信友の冊誠や  
 辰士の篇を仰て七十二壽二世松原庵鳥酔連

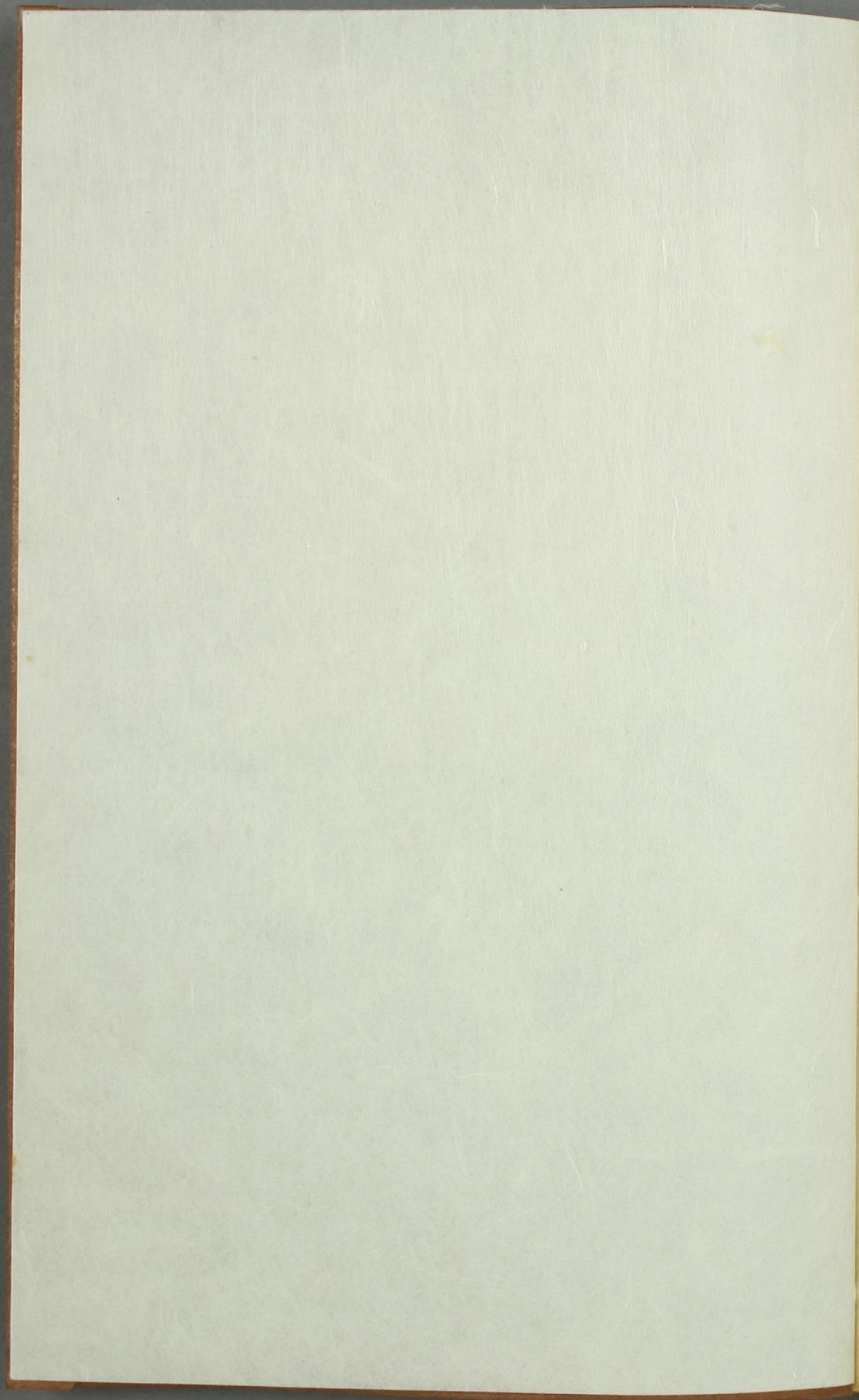
酉時雨月

一圓

鳥酔連

東京文具チエーン特製

全四十丁 隈工知糸色表紙



原寸

